

講座から個人面談へ 職業レディネス・テストの連続的活用

自由が丘産能短期大学 キャリア支援センター 義間直美
CDA (キャリア・デベロップメント・アドバイザー)

本短期大学の就職対策講座は1年生の10月から本格的に始まります。講座の初回に全員を対象に「職業レディネス・テスト」を実施します。この回は授業の1コマ(90分間)に「キャリア支援力イダンス」として組み込まれており、平成24年度は8割以上の学生(554名)が参加しました。

職業レディネス・テストの実施の目的

実施の目的は、①興味と能力(自信)の特徴についてA検査(職業興味)とC検査(自信度)から理解する、②職業選択における興味と能力の関係について理解し、職業情報の収集方法をj知る、としています。時間の関係で、B検査(基礎的志向性)は実施できず、各自の課題となります。プログラムは、テストの実施、自己採点、プロフィール作成、解説、「結果シート」への記入・提出という構成です。講義を雇用問題研究会の講師に依頼し、職業選択における興味と自信の関係についてポイントを置いて解説していただいています。

職業選択の際、興味も自信も高いことは理想です。また、興味は重要ですが、「好き」だけでは仕事はできません。そこで、まず興味のある職業についてはさまざまな情報源(アルバイト体験、企業説明会参加、OG情報、インターネット、インターンシップへの参加等)から調べ、活用する方法を教えます。

例えば、S(社会的)やE(企業的)領域が高い学生が、就職活動の初期に憧れる職業の一つ、ウェディングブライナー。一生に一度の晴れ舞台を演出する華やかなイメージですが、仕事内容、

求められる能力、必要な免許・資格、やりがいや大変なこと、自身のライフスタイル等を調べるうちに、消費者目線の理想から仕事目線の現実シフトされ、そのギャップが見えてきます。

次に、「興味は低いが自信が高い」という職業領域も、選択肢の一つになることを伝えます。例えば、S(社会的)領域にある介護職。本学では毎年20名以上の学生が就く職種で、卒業生も活躍し、企業から評価いただいています。「人と接する仕事がいい」と多くの学生は言いますが、人と接しない仕事などほとんどありません。「どう接したいか」を考えていく必要があります。例えば介護職の場合、「キツイ」とひとくくりにされがちですが、その仕事内容や卒業生のリアルな声を紹介すると、イメージが広がり、選択肢の一つに徐々に変化していきます。

活用の効果

卒業生の一人であるAさんは、ウェディング業界にこだわり続け就職活動が続けてきましたが、結果が出ず、途方にくれていたことがありました。面接官に「私はこの業界に向きますか?」と問うと、「はつきり言って君は優しすぎて向かないと思う」と助言され、そこで目が覚め、「私の思う『人と接する仕事』とはなんだろう?」と真剣に考え始めました。高校時代のボランティア経験やサービスマスター資格の保有、興味は低いが自信のある領域であることを指導スタッフとの面談で思い出し、介護職を考えるきっかけとなりました。

私たちスタッフは、学生の進路選択決定のためにホランド理論を活用し、このようなケースを講師との打ち合わせ

の段階でいくつも伝え、講義の中に取り入れていただいています。

講義の最後に、検査結果は適職診断ではなく、きっかけ作りであること、結果は固定のものではなく、体験を通じて変化するものであることを強調します。「結果シート」には、職業選択において視野の広がりや自己理解が促進されたという感想が書かれてあります。

ホスピタリティを学ぶコースであり、人と接することが好きで、そのような仕事に合っていると思っていたが、テストをやってみてC(慣習的)に興味・自信とも高く、事務職に適性があることが分かった(日商簿記2級保有)。

事務系だけだと考えていたが、誰かをサポートするような仕事にも興味・自信があることが分かった。パソコン関係でかつサポートできる仕事を探したい(情報系コース学生)。

本学ではこの結果を、2月からの個人面談(初回は1人20分間)に活用します。進学先を音楽の専門学校と迷った経験があり、音響の仕事に就きたいという学生は、興味・自信ともA(芸術的)、R(現実的)領域が高く出ました。中高時代の吹奏楽部での活躍に耳を傾けながら、「テストの結果にも表れているね」と結果シートを見せ、レポート形成をします。そして、測定結果をきっかけに、専門性の高い職業に就くにはどんな方法があるか、春休み中に情報収集し、関連のある企業の説明会に行くことを課題としました。

このように職業レディネス・テストは、学生の進路選択条件の把握や信頼関係構築に役立ち、適性を踏まえた指導をサポートしてくれるツールとなっています。